
□ 総会講演会レポート

一般社団法人全日本駐車協会

演 題：遊里内藤新宿－都市開発と文化の視点

講 師：立教大学名誉教授 渡辺 憲司様

第61回通常総会に引き続き、立教大学名誉教授 渡辺憲司様より、「遊里内藤新宿－都市開発と文化の視点」と題して、ご講演を頂きました。



.....

< 講師紹介 >

渡辺憲司様は1944年北海道函館市生まれ。立教大学文学部卒業後、横浜市立商業高校(定時制)、私立武蔵中学高校、梅光女学院大学(現梅光大学)、立教大学、立教新座中学高校校長、自由学園最高学部長などをへて、現在立教大学名誉教授。

専門は江戸時代の文化・文学の研究。

単著「近世大名文芸圏研究」、「江戸遊女紀聞」、「江戸遊里の記憶」、「いのりの海へ」、「生きるために本当に大切なこと」、編著「江戸アンソロジー」、「江戸川乱歩事典」、「色道大鏡」など。

< 講演内容 >

江戸時代における①遊里の形成と都市計画、②岡場所の隆盛、③岡場所の代表格の一つ「内藤新宿」について、説明がありました。概要は以下の通りです。

遊里の形成と都市計画は表裏一体である。

① 遊里の形成と都市計画

- ・江戸幕府の開府に伴い人が江戸に集まり、働き手である男衆を労う場として幕府公認の吉原が出来たが、明暦3年(1657年)に明暦の大火が起き、都市復興の際に人形町(元吉原)から浅草(新吉原)に移転した。

② 岡場所の隆盛

- ・18世紀中頃になると江戸は自律的に独自の文化を持ち始め、社会の中心は武士から中間層である町人に移っていった。当時の老中田沼意次は印旛沼の干拓や北海道への進出など積極的な日本改造を行ったが、緩和政策の下で規則の喧しい公娼(吉原)が衰微し、私娼(岡場所：吉原以外の遊郭)が隆盛を迎えた。代表的な岡場所は品川と深川であるが、品川は宿場町で自然発生的に生まれた。深川は埋め立て地であり、門前町として計画的に作られた。

③内藤新宿

- ・演題のテーマである内藤新宿は、浅草の商人が幕府に上納金を納めることで、元禄12年(1699年)に開設された。開設にあたっては内藤家の屋敷などを幕府に返上させている。内藤新宿は現在の新宿通りを挟むように作られたが、現在でも新宿2丁目や3丁目は当時の雰囲気を残している。なお、甲州街道は江戸が攻められたときに甲州に逃れるための逃げ道で、日本橋から第一宿である高井戸までは距離があるために中間地点である新宿に宿場町が置かれた。
- ・倫理観や儉約を旨とする吉宗時代の享保3年(1718年)、大岡忠助の裁断により宿場が廃止される。これは内藤大八事件(内藤新宿開設時に屋敷などを取り上げられ、不満を持っていた内藤家の家臣の一人が起こした事件)がきっかけとされているが、自分としては、遊里や芝居を拡大するなど積極的商業主義を旨としていた尾張徳川家(徳川宗春)に対する吉宗の対抗意識もあったのではないかと考えている。
- ・取り潰しから53年後の明和9年(1772年)には、積極的商業主義を掲げ開発を奨励した田沼政治のもとで内藤新宿は復活するが、その背景には平賀源内の身元引受人である平秩東作(へづつとうさく：新宿の煙草屋・馬借)といった山師(投資家)がいた。平秩は自身も戯作者、狂歌師であるが、大田蜀山人を世に出すなど、狂歌壇の中心でもあった。

以上のように、内藤新宿は幕府の方針に翻弄されながら、文化都市としての様相を色濃く残り、現在のターミナル駅へと発展してきた。遊里としては、吉原(赤線)の対抗として成立し、青線文化(岡場所)を色濃く残した場所で、レジスタンス(自由)への萌芽と文化という、江戸時代の地霊と近代の新宿は地脈を通じているであろう。